

私がデザインにかかわる初頭、幾つかの触発される出来事に出会った。そのひとつが九鬼周造著『いきの構造』との出会いであった。購入したのは、まだ高校生だった。その後大学時代、PR誌『エナジー』の仕事でその著作に接したことなど、幾度か目にするようになる。そこには「いき」の哲学的考察が直方体を使って解説されたひとつの図形が記載されていた。

もうひとつの出来事、梅棹さんの思考を知るきっかけも、この『エナジー』誌からで、六〇年代はじめ『文明の生態史観』に出てくる「ユーラシア大陸の模式図」だった。著書のなかで「歴史というのは方法的に限定されている。文献がないところは存在しないということが建前になっている。しかしそれでは解けないことがいっぱいある。そのひとつが歴史的ゲシュタルトの構築、つまり構図設定である」と言われた。事柄の概略図あるいは原理図は、我々が考えるダイヤグラムの領域を超えるもので、私に大きな示唆を与えた。

梅棹さんと直に接するようになったのは、民博準備室が文部省にでき、通われていたころだ。打合せの後、青山の自宅に来てもらったこともある。現在ファッショントデザイナーとして活躍している息子が生まれたばかり。その赤ん坊を抱いて、ご自身の息子さんと重ね合わせながらあやしていたことも思い

プロフィール  
1931年東京生まれ。グラフィックデザイナー。みんなく開館時より、シンボルマークをはじめ、展示企画特別委員会委員として数多くのグラフィックデザインに関わり、万博のADなども手がける。フルブックデザインビエンナーレ金賞、芸術選奨文部大臣賞など受賞多数。また、その作品はニューヨーク近代美術館やチューリッヒ造形美術館などに収蔵されている。  
武蔵野美術大学名誉教授。



## 梅棹忠夫のデザインポリシー

勝井三雄

出深く、その息子ももう三七才。

みんなくのシンボルマークをデザインしているときは、いくつ案を出しても「もうちょっと」で「うん」と言ってもえなかった。「七大陸・文明圏」というイメージはあるが、具体的に表現に落とす難しさがあった。話をしているうちに、地球の連帯と活動をあらわしたと思うようになってきた。色は、海洋や天体を意味するものとして、はじめから青群から選ぶことを決めていた。

同時に、「友の会」のマークを制作した。外側の七つの大陸が移動するダイナミックな形、内側に形を閉じ込めるようなトポロジ的な表現をすることで、友の会がみんなくを外側から囲っていくようなイメージになった。

とにかく梅棹さんは、デザインに対するこだわりをもっていた。名刺に使う書体でさえ容赦しなかった。それぞれの文字が旨くハーモニーするかなど、細かく要求する。「名刺は人の顔だ。名刺からはその人の品格がわかる」と、非常にこだわった。梅棹さんは、デザイナーに匹敵する感性をもち、デザインポリシーに対する夢をもっておられた。当時そうした資質をもつ起業家でさえ少なかった時代であった。

大抵は「あなたにまかすよ」と言われることが多かった。僕はそうした梅棹さんに触発され、信頼されたことに誇りをもっている。

月刊  
みんなく  
4月号目次

- |    |  |    |  |
|----|--|----|--|
| 1  | エッセイ 千字文<br>梅棹忠夫のデザインポリシー 勝井 三雄                      | 12 | みんなく Information                                       |
| 2  | 特集 聞こえてくるもの 耳よりの話<br>聴覚の情報論 久保 正敏                    | 14 | 地球ミュージアム紀行<br>大エジプト博物館保存修復センター<br>日高 真吾                |
| 3  | 「耳ふさぎ」と「忘れられない話」 常光 徹                                | 15 | みんなく 私の逸品<br>復活祭装飾用卵<br>新免 光比呂                         |
| 4  | レコードと「純正な日本語」<br>バスガイドの語る《別府温泉地獄めぐり》は何をもたらしただのか 渡辺 裕 | 16 | 散策と思索の径<br>台湾で、ラフ人をたずねて<br>西本 陽一                       |
| 5  | 「広島へタバコ買いに……」 近藤 雅樹                                  | 18 | 多文化をささえる人びと<br>外国人のための専門家相談会<br>東京外国人支援ネットワーク<br>杉澤 経子 |
| 6  | 声明の伝承と変容 澤田 篤子                                       | 20 | 歳時世相篇<br>アマゾン川上流の聖週間<br>齋藤 晃                           |
| 7  | もし、神さまと出会ったら 小長谷 有紀                                  | 22 | フィールドで考える<br>まずは心と身体を解きほぐす<br>上羽 陽子                    |
| 8  | 鳥の声は神の声<br>——ボルネオ島ブナンの「聞きなし」から 卜田 隆嗣                 | 24 | 次号予告・編集後記  |
| 9  | コーランの伝承とメディアの変化 西尾 哲夫                                |    |  |
| 10 | 研究フォーラム<br>果敢に挑戦——みんなく若手研究者奨励セミナー<br>信田 敏宏           |    |  |